九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本語動詞現在時形態論（三）

マツオキヌ

吉町，義雄

https://doi.org/10.15017/2557033

出版情報：文學研究. 19, pp.52-94, 1937-05-27. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

日本語動詞現在時形態論（三）

マッオキヌ
吉町義雄譯

第五章　形態質-ℓは全四活用に於ける現在時全形語尾【三六—五九頁】

第一節　探究方法【三六—七頁】

何が現在時語尾であるか、日本語舊新歐文法が敎へる樣に、我々は若干の語尾を又は全形卽ち終結・限定、終結と限定形に於ける全四活用動詞に對して一切を有するかと云ふ事に就ての問題は、結局探究方法に就ての問題に歸するが、後者は全然問題自身の性質によつて定められる。

現在時語尾に就ての此問題は徹頭徹尾此形態論問題であるが故に、探究出發點が語形採用でなければならないのは當然である。

語形を我々は、一般通用觀點に從つて、「語基附屬物と形式附屬物とは箇々の語に分離する事が出來、かくて同語は、同じ意義を有する同じ語基附屬物が他の形式附屬物を有する他語に於ても存し、同じ形式意義を有する同じ形式附屬物が他の語基附屬物を有する他語に於ても存するならば、其場合にのみ、形を有するものとして、意識され得るのである」(1) と見做して、語基附屬物と形式附屬物へ語が分裂する手段と解する事にしよう。

從つて、異る形式附屬物に際して同一語基をそして同一形式附屬物に際して異る語基を有する他語との比較の爲にのみ若し語が是等形態部に分裂するならば、探究方法も、一方からは異る形式附屬物に際して同一語基を有し、他方からは同一形式附屬物に際して異る語基を有する語の對照に成立しなければならない。斯かる方法に際しては對照される語、又は所與の場合、動詞は當然語基と形式との附屬物に分裂しなければならないであらうし、現在時語尾である形式附屬物は謂はゞ自ら分離しなければならないのであらう。

此方法は如何なる根據無き空想であらうとも、混合物無き全く客觀的結果の受取の可能性を保證し、凡ての場合に於て無根據な斷言を與へしめない。

是等考察から出發して、我々は我々が興味を有する問題への回答を與へようと企てる譯なのである。

第二節　形態質-ɪ-は第一活用動詞現在時終結・限定形語尾【三七頁】

第一番に第一活用動詞現在時終結・限定形へ轉じて、此形の語尾は實際に、日本語舊新歐文法が斷言する樣に、形

態質-*u*なのである。

次の動詞形の對照

kiku, ojogu, sasu, macu, vakaru, jobu, ka(f)u, jomu（現在時）、

kiki, ojogi, sasi, maci, vakari, jobi, ka(x)i, jomi（不定形）、

kika-, ojoga-, sasa-, mata-, vakara-, joba-, kaxa-, joma-（否定語基）、

kike-, ojoge-, sase-, mate-, vakare-, jobe-, ka(x)e-, jome-（條件語基）(2)

は其等に於ける次の語基と形式附屬物の分離へ至るのである。

kik+u, ojog+u, sas+u, mac+u, vakar+u, job+u, ka(f)+u, jom+u,

kik+i, ojog+i, sas+i, mac+i, vakar+i, job+i, kax+i, jom+i,

kik+a-, ojog+a-, sas+a-, maf+a-, vakar+a-, job+a-, kaxa+a-, jom+a-,

kik+e-, ojog+e-, sas+e-, maf+e-, vakar+e-, job+e-, ka(x)+e-, jom+e-,

も現在時終結・限定形語尾は形態質、又は形式附屬物-*u*、不定形語尾は形態質-*i*、所謂否定語基の接尾辭は形態質-*a*-であり所謂條件語基の接尾辭は形態質-*e*-であると云ふ事を明示してゐる。

第一水平行【本譯文では垂直行】に於ける異る語基を有する動詞と垂直段【本譯文では水平段】に於ける同一語基を有する動詞との對照は、第一活用動詞終結・限定形語尾は形態質-*u*のみであると云ふ事を語つてゐる。

第三節　形態質 -u は第二及び第三活用動詞現在時終結形語尾、そして兩活用に於ける其同一性【三八頁】

現在時終結形に於ける第二及び第三活用動詞の類似對照なるものは、其語尾は形態質 -u であると云ふ事を明示してゐて、其は次の列が確信させる。

uu, kaku, agu, miju, kisu, tacu, idzu, nagaru, inu, tabu, kofa(f)u, tomu (現在時)、

*u(v)e, kake, age, *mije > mie, kise, tate, ide, nagare, ine, tabe, kofa(x)e, tome* (不定形)、

oku, sugu, kuju, ocu, xadzu, oru, abu, ci(f)u, cinu (現在時)、

*oki, cugi, *kuju > kui, oci, xadzi, ori, abi, ci(x)i, cini* (不定形)。(3)

是等列に於ける前掲動詞形は次の様に語基と形態質とに分裂する。

u+u, kak+u, ag+u, mij+u, kis+u, tac+u, idz+u, nagar+u, in+u, tab+u, kofa(f)+u 等、

*u(v)+e, kak+e, ag+e, *mij+e > mi+e, kis+e, tat+e, id+e, nagar+e, in+e, tab+e, kofa(x)+e* 等、

ok+u, sug+u, kuj+u, oc+u, xadz+u, or+u, ab+u, ci(f)+u, sin+u,

*ok+i, sug+i, *kuj+i > ku+i, oc+i, xadz+i, or+i, ab+i, si(x)+i, sin+i.*

此處に於ても我々は異る語基 *u-* (< **uv-*), *kak-*, *ag-* ..... *ok-*, *cug-* 等に際しては同じ現在時終結形を取る時は同一形式附屬物 *-u* を、第二活用不定形を取る時は *-e* を、そして第三活用不定形を取る時は *-i* を發見するので

あつて、同一語基、例へば *u-*, *kak-* 又は *ok-*, *sug-* に際しては、如何なる形に於て我々が所與動詞を取るかに依從して異る形式附屬物、第二活用に於ては *-u*, *-e* そして第三活用に於ては *-u*, *-i* を發見するのである。

かくて、第二及び第三活用動詞現在時終結形語尾は形態質 *-u* であると云ふ結論に來るのであつて、第二活用動詞に於ける形態質 *-u* と第三活用動詞に於ける形態質 *-u* との間には如何なる形態差異も顯れざるが故に、我々が取扱ふのは同一形態質であつて、第二活用動詞現在時語尾「得る」說が斷言する樣な、二つの異る形態質ではないのであると我々は見做す權利があるのである。

第四節　形態質 *-u* は第二及び第三活用動詞現在時限定形語尾、そして兩活用に於ける其同一性【三八—四一頁】

さて第二及び第三活用動詞現在時限定形語尾の說示へ移つて、此限定形及び所謂條件語基で取つた動詞列を我々は對照しよう、例へば

uuru, *kakuru*, *aguru*, *mijuru*, *kisuru*, *tacuru*, *idzuru*, *nagaruru*, *inuru*, *taburu* 等（限定形）、

uure-, *kakure-*, *agure-*, *mijure-*, *kisure-*, *tacure-*, *idzure-*, *nagaure-*, *inure-*, *tabure-* 等（條件語基）、

okuru, *sugure*, *kujuru*, *ocuru*, *xadzuru*, *oruru*, *aburu*, *ci(f)uru*, *sinuru*（限定形）、

okure-, *sugure-*, *kujure-*, *ocure-*, *xadzure-*, *orure-*, *abure-*, *si(f)ure-*, *sinure-*（條件語基）。

我々が是等動詞形を水平行に從つてのみ比較するならば、其等は次の様に語基と或形式附屬物 *-uru*, *-ure-* に分裂する。

u+uru, kak+uru, ag+uru, mij+uru, kis+uru, tac+uru, idz+uru, nagar+uru, in+uru, tab+uru 等、

u+ure-, kak+ure-, ag+ure-, mij+ure-, kis+ure-, tac+ure-, idz+ure-, nagar+ure-, in+ure-, tab+ure- 等、

ok+uru, sug+uru, kuj+uru, oc+uru, xadz+uru, or+uru, ab+uru, si(f)+uru, sim+uru,

ok+ure-, sug+ure-, kuj+ure-, oc+ure-, xadz+ure-, or+ure-, ab+ure-, si(f)+ure-, sim+ure-。

形式附屬物 *-uru* は通常現在時限定形語尾と、*-ure-* は所謂條件語基の接尾辭と誤認される。

是等形式附屬物 *-uru, ure-* を我々が相互對照するならば、是等は *∨-ur+u* 及び *-ur+e-* に分裂すると云ふ事が解るのであつて、是は是等が或共通形式附屬物 *-ur-* を有すると云ふ事を意味する。是等共通形態質を、現在時限定形語尾と誤認されるものに於ても、そして所謂條件語基の接尾辭と誤認されるものに於ても我々は發見するが故に、此共通形態質は現在時限定形の意義をも所謂條件語基の意義をも創造しないと云ふ事は明確なのである。

併し是が左様ならば、是等形の意義は共通部 *-ur-* でなく、是等が特に形態質 *u* と形態質 *e* とに於て相互に差別される部分によつて創造されると云ふ事になるのである、が是は形態質 *u* が形式附屬物、又は現在時限定形語尾であり、形態質 *e* が所謂條件基語の接尾辭であると云ふ事を意味する。【原著補註第三　條件語基、其は所謂　活　用　の條件語基であるが故に、接尾辭 *-e-* は條件意義でなく、*-ba* に終る現在時條件形又は *-do, -domo* に終る同じ時制讓歩

形が其からのみ形成され得るもする様な派生語基の意義を語基に傳へると云ふ事は自明なのである。】

此共通形態質 -ur- は實際に現在時限定形意義をも、所謂條件語基の意義をも創造しない、又は換言すれば、第一語尾にも第二接尾辭にも構成に入らないで、動詞派生語基に屬すると云ふ事、其は我々は少し下に於て確信する。是と共に我々は、形態質 u は實際に現在時限定形語尾であり、音聲質 e は所謂條件語基の接尾辭であると云ふ事が解るのである。

是等形を我々が垂直段によつて相互對照するならば、是等は次の様に語基及び形式附屬物に分裂すると云ふ事が分る。

uur+u, kakur+u, agur+u, mijur+u, kisur+u, tacur+u, idzur+u, nagarur+u, inur+u, tabur+u,

uur+e-, kakur+e-, agur+e-, mijur+e-, kisur+e-, tacur+e-, idzur+e-, nagarur+e-, inur+e-, tabur+e-;

okur+u, sugur+u, kujur+u, ocur+u, xadzur+u, orur+u, abur+u, si(f)ur+u, simur+u,

okur+e-, sugur+e-, kujur+e-, ocur+e-, xadzur+e-, orur+e-, abur+e-, si(f)ur+e-, simur+e-,

現在時限定形語尾は形態質 -u であるが、所謂(アキマ)條件語基の接尾辭は形態質 -e- であると云ふ事が是から生ずる。

垂直段による是等形の比較に際して得られる語基を相互對照して、我々は今度は是等が次の様に構成形態部に分裂

するのが解らう。

uur-, kakur-, agur-, mijur-, kisur- ..... tabur- >

u+ur-, kak+ur-, ag+ur-, mij+ur-, kis+ur- ..... tab+ur-;

okur-, sugur-, kujur-, ocur-, xadzur- ..... sinur- >

ok+ur-, sug+ur-, kuj+ur-, oc+ur-, xadz+ur- ..... sin+ur-,

是等語基に於て是等全部に共通な或形式附屬物、又は形態質 *-ur-* が分離すると云ふ事が解るのは困難でなく、是は是等語基が 單 一 物 で な く、單一語基プラス或形式附屬物、又は或接尾辭 *-ur-* から成立する 派 生 物 であると云ふ事を意味する。

今我々が是等派生語基を我々に檢討される動詞形に置換へるならば、後者は次の體裁を採用する。

uuru > *(u+ur)+u, kakuru* > *(kak+ur)+u, aguru* > *(ag+ur)+u,*

mijuru > *(mij+ur)+u, kisuru* > *(kis+ur)+u ... taburu* > *(tab+ur)+u,*

uure- > *(u+ur)+e-, kakure-* > *(kak+ur)+e-, agure-* > *(ag+ur)+e-,*

mijure- > *(mij+ur)+e-, kisure-* > *(kis+ur)+e,*

okuru > *(ok+ur)+u, sugure* > *(sug+ur)+u, kujuru* > *(kuj+ur)+u,*

ocuru > *(oc+ur)+u, xadzuru* > *(xadz+ur)+u ..., sinuru* > *(sin+ur)+u,*

okure- > *(ok+ur)+e-, sugure-* > *(sug+ur)+e-, kujure-* > *(kuj+ur)+e-,*

ocure- > *(oc+ur)+e-, xadzure-* > *(xadz+ur)+e- ... sinure-* > *(sin+ur)+e-,*

かくて、第二及び第三活用動詞現在時限定形語尾は實際に形態質 -u- であるが、同じ活用の所謂條件語基の接尾辭は形態質 -e- である、何とならば此限定形及び條件語基は形態質 -u 及び -e- のみによつて相互に差別されるからと云ふ同じ結論に我々は再び來るのである。

是と共に我々は、是等活用現在時限定形は接尾辭 -ur- によつて擴張される單一語基から成立する派生語基へ語尾 -u- を附加して形成されるが、同じ活用の所謂條件語基は同じ派生語基へ接尾辭 -e- を附加して形成されると云ふ事が解る。

第二活用動詞現在時限定形語尾としての形態質 -u は、第三活用動詞現在時限定形語尾としての形態質 -u と形態的には少しも區別されないが故に、我々は二つの異る形態質でなく、同一形態質 -u を有すると見做す事が出來る。同じ理由によつて、我々は條件語基接尾辭は第二活用動詞に於ても、第三活用動詞に於ても同一形態質 -e- であると云ふ事を採用し得るのである。

第五節　形態質 -u- は第二及第三活用動詞現在時口語形語尾【四一—二頁】

同じ語尾 -u 及び同じ接尾辭 -e- を我々は第二及び第三活用動詞の現在時及び條件語基の對應口語形に於ても有すると云ふ事を、我々は派生語基に於ては接尾辭 -ur- の代りに第二活用に對しては接尾辭 -er- そして第三活用に對しては接尾辭 -ir- を發見すると云ふ差異のみを以て確信するのは容易である。

現在時同口語形のみ、例へば同じ *u(v)eru, kakeru, ageru, mieru* ..... *taberu* に於ける動詞對照は或形態質 -*eru*

なる分離に至り、口語條件語基 *u(v)ere-*, *kakere-*, *agere-*, *miere-* ..... *tabere-* に於ける動詞對照は *-ere-* なる分離に導く。*-eru* と *-ere-* との對照は、其等が共通形態質 *-er-* プラス現在時形に對しては單一非可分解形態質 *-u* そして所謂條件語基に對しては同じ單一非可分解形態質 *-e-* から成立する複合形態質であると云ふ事を明示してゐる。是等形態質に於ける差異は動詞形意義に於ける差異に對應するが故に、我々は形態質 *-u* は現在時語尾であり、形態質 *-e-* は條件語基の接尾辭であると結論する。

現在時口語形に於ても、口語條件語基に於ても動詞相互對照なるもの、例へば同じ *u(v)eru—u(v)ere-*, *kakeru—kakere-*, *ageru—agere-*, *mieru—miere-* .... *taberu—tabere-* は是等動詞に於ける語基 *u(v)er-*, *kaker-*, *ager-*, *mier-* ..... *taber-* 及び二形態質、現在時に對しては形態質 *-u* そして所謂條件語基に對しては形態質 *-e-* なる分離に至るのである。

是等語基相互新對照は是等を單一語基プラス或接尾辭 *-er-* に分解せしめ、そして是等語基は派生的であると云ふ事を明示してゐる。

是等派生語基 [*u(v)+er*]-, (*kak+er*)-, (*ag+er*)- 等を一方からは *u(v)eru*, *kakeru*, *ageru* 等そして他方からは *u(v)ere-*, *kakere-*, *agere-* 等の被檢討形に置換へるならば、現在時形に於ては形態質 *-u* が、所謂條件語基に於ては形態質 *-e-* が分離されると云ふ事が更に解るのであるが、是は勿論形態質 *-u* は現在時口語形語尾、形態質 *-e-* は第二活用の所謂條件語基の口語接尾辭であるとでも云ふ事を表すに外ならない。

同様に我々は第三活用動詞に對しても類推的結論へ來るのである。

第六節　形態質 -u は第四活用動詞現在時終結・限定形語尾、そして其第一活用動詞現在時終結・限定形語尾なる形態質との同一性【四二—四三頁】

今度は第四活用動詞へ轉じて、我々は上に使用した現在時終結・限定形と所謂條件語基との同じ對照を求めよう。例へば動詞 *iru*,（花を）沃る、*kiru*, 着る、*miru*, 見る、視る、を取らう。*iru*——*ire-*, *kiru*——*kire-*, *miru*——*mire-* なる對照の爲に共通形態質 *-u* 及び *-e-* を有する語基 *ir-*, *kir-*, *mir-* は對應的に分離するのであつて、是からして、形態質 *-u-* は現在時終結・限定形語尾であり、形態質 *-e-* は所謂條件語基の接尾辭であると云ふ事が生ずる。

所與の場合に於て我々が是等動詞の單一語基 *i-*, *ki-*, *mi-* と誤認する是等動詞の所謂不定形 *i*, *ki*, *mi* と *ir-*, *kir-*, *mir-* とを對照して、我々は *ir-*, *kir-*, *mir-* は後者へ接尾辭 *-r-* を補足して非派生語基 *i-*, *ki-*, *mi-* から形成される派生語基であると解する。

從つて、第四活用動詞現在時終結・限定形は派生語基へ語尾 *-u* を補足して、條件語基は接尾辭 *-e-* を補足して形成される。

同じ結論へ我々は次の様にしても移り得る。或第四活用動詞を現在時終結形に於ける第二活用對應動詞と對照する。

例へば次の動詞を取らう。

kiru, 着る、—— *kisu*, 二活（終結形）、着す、即ち、着せてやる、

miru, 見る、視る—— *misu*, 二活（終結形）、見す、即ち見せてやる、

niru, 似る—— *nisu*, 二活（終結形）、似す、即ち、似せてやる。

是等一對動詞の相〔zalog〕的意義に於ける差異は、明確に是等動詞の語基である様な先行共通部に續く音聲質*さ*と連絡して存するのであると解するのは困難でない。が是は是等動詞の相的意義が對應的に音聲質*さ*によつて創造されるのであると云ふ事を意味する。が其時は是等音聲質は相形成的接尾辭に外ならないのであつて、*さ*は *kiru* と *miru* とに於ける他動相接尾辭であり、*miru* に於ける自動相接尾辭であるが、音聲質*ら*は舊使役相接尾辭であるのである。音　質*さ*、*ら*を接尾辭と認識すると云ふのは同じく、是等接尾辭に續く音聲質*u*は現在時語尾に外ならないと云ふ事、又は接尾辭 *-さ-* に續く音聲質 *u* は第四活用現在時終結・限定形語尾であるが、接尾辭 *-ら-* に續く音聲質 *u* は第二活用の同じ時制終結形語尾であると云ふ事を認識する意味なのである。

單一語基プラス接尾辭（所與の場合には其々の接尾辭 *-さ-*）は派生語基を與ふるが故に、是は第四活用動詞現在時終結・限定形は單一語基（*ki-*, *mi-*, *ni-* 等）へ、考へ得られる如く、語尾 *-su* をでなく派生語基（*kir-*, *mir-*, *nir-* 等）へ語尾 *-u* を補足して形成されると云ふ事を意味する。

第四活用動詞現在時終結・限定形語尾に關連して、是は第一活用動詞の同じ時制終結・限定形語尾と同一であると云ふ事、又は換言すれば、第四又は第一活用動詞現在時終結・限定形語尾は同一形態質 *-u* であると云ふ事を認めな

い譯に行かない。此同一性は、第四活用動詞現在時終結・限定形語尾としての形態質 -u と第一活用動詞の同じ形語尾としての形態質 -u との間には如何なる形態差異をも認めるのが不可能であると云ふ事から出て來るのである。

第七節　形態質 -u は變格動詞現在時語尾【四三—四頁】

今我々が變格動詞現在時語尾へ移つても、此處では何も新しいものに遭遇しない。

動詞「死ぬ」*sinu*——*sini*——*sinu* 形の對照は、此動詞の現在時終結形語尾は形態質 -u であると云ふ事を語つてゐる。

Sinuru——*sinure* - なる對照は、同じ時制限定形語尾は同じく形態質 -u であり、所謂條件語基の接尾辭は形態質 -e - であると云ふ事を明示する。

變格動詞 *ku, kuru,* 來る、*su, suru,* 爲る、の現在時語尾へは、動詞 *fu, furu, nu, nuru* に就て下述されるであらう凡てが全く應用される。

變格動詞 *keru,* 蹴る、へは第四活用動詞に就て直前既述のもの、卽ち現在時終結・限定形語尾は、派生語基へ、所與の場合には *ker* - へ附加される形態質 -u であるもの凡てが關係する。【原著補註第四　現在時　終結形語尾が起源によれば　不定形語尾 -i と同一であり得る形態質 -i である動詞 *aru,* 在る、は例外である。】

第八節　第二及び第三活用動詞終結及び限定形語尾としての形態質 -u の同一性、そして現在時全形一般に於ける其同一性【四四―五頁】

かくて、第一及び第四活用動詞現在時終結・限定形に對しては同　語　尾　-u　を、第二及び第三活用動詞の同じ時制終結形に對しては同　語　尾　-u　をそして同じ活用の同じ時制限定形に對しては同　語　尾　-u　を有すると云ふ事を我々は發見する。

併しながら、現在時終結形語尾 -u 及び同じ時制限定形語尾同じく -u への關係によつて、我々は實は同一語尾 -u を有しないのかと云ふ問題が生ずる。

現在時上名全語尾は同一時制範疇を表現すると云ふ　既　に　其　一　情況が、全四活用に於てそして現在時全形に於て我々は同一語尾 -u を有してゐると云ふ事を辯護してゐるのである。

此外に、第二及び第三活用動詞現在時終結及び限定形に於て我々は或場合には　單　一、他の場合には　派　生　の二つの異る語基を有すると云ふ事實は、是等現在時形に於ける形態差異は此時制の終結及び限定機能に對して樣々の語基が、特に、終　結　に　對　し　て　は　單　一　語　基　が、限　定　に　對　し　て　は　派　生　語　基　が　利用されたと云ふ事によつて招かれたのであると云ふ事を指示してゐる。

が是が左樣であるなら、即ち實際に第二及び第三活用動詞現在時終結及び限定形間の差異が、單一及び派生の二つの異る語基の利用されたと云ふ事の結果生じたのなら、現在時終結形語尾 -u 及び同じ時制限定形語尾 -u は同上形

態質-*u*であつて、其は第一及び第四活用動詞に於て終結及び限定機能をも帯するのであり、從つて、全四活用に於て現在時範疇は同一語尾-*u*を表現するのである。

此推測は下次の所與によつて確められると思ふ。

第九節　第二活用動詞現在時終結及び限定形語尾-*u*と第一活用動詞現在時終結・限定形語尾との同一性【四五—九頁】

或動詞は第一活用によつても第二活用によつても活用すると云ふ一般周知の事實へ注意を轉ずるのが何よりも必要である。是等動詞は二群を形成する。第一群へは其現在時終結形が第一活用動詞の同じ時制終結・限定形と同一なる第二活用動詞が屬し、第一活用へは其現在時限定形が今度も亦第一活用動詞の同じ終結・限定形と同一なる第二活用動詞が關係する。

(一)　第二活用動詞現在時終結形語尾-*u*と第一活用動詞現在時終結・限定形語尾-*u*との同一性

第一群は次の動詞から成立する。

(A)　自動詞

nabik, 一及二活、靡く、

fujaku, 一及二活、潤く、

jiru, 一及二活、搖る、

kakuru, 一及二活、隱る、

kowaru, 一及二活、毀る、

kusaru, 一及二活、腐る、

mamiru, 一及二活、塗る、

midaru, 一及二活、亂る、

soru, 一及二活、逸る、

taru, 一及二活、滴る、

fukuru, 一及二活、膨る、

furu, 一及二活、觸る、

kanu, 一及二活、兼ぬ、

muka(f)u, 一及二活、向ふ、

sasura(f)u, 一及二活、流離ふ、

sina(f)u, 一及二活、撓ふ。

(B) 他動詞

kodziku, 一及二活、乞食く、

xaku, 一及二活、佩く、
xasiku, 一及二活、艀く、
matagu, 一及二活、跨ぐ、
samatagu, 一及二活、妨ぐ、
vasuru, 一及二活、忘る、
(v)osoru, 一及二活、恐る、

【原著補註第五　Rodriguez によつて與へられる《*vosore*》(*wosore*) なる形から出て、日本字母圖を根據として生ずであらう樣に、動詞「恐る」を私は *osoru* でなく、*(v)osoru* と寫音する。Rodriguez 寫音法は、三百年前に摩擦兩唇の *v*(*w*) が母音音聲質 *o* の前の位置にある語頭に於て發音されたと云ふ事を明示してをり、此事實は私の意見によれば、對應寫音法もて特に記される價値があるのである。】

fusibu, 一及二活、燻ぶ、
adzaru(f)u, 一及二活、糾ふ、
ira(f)u, 一及二活、應ふ、
kita(f)u, 一及二活、鍛ふ、
sara(f)u, 一及二活、浚ふ、
utta(f)u, 一及二活、訴ふ、

ijasimu, 一及二活、卑しむ、

kivamu, 一及二活、究む、

midsikamu, 一及二活、短む等。(4)

第二活用によつて取られた是等動詞からの任意現在時終結形が第一活用によつて取られた同じ動詞の現在時終結・限定形から何によつて區別されるか、是は何人も勿論語らないであらう。我々が第一活用によつて取る時、是等動詞に於ける現在時範疇を表現する語尾 -*u* が、何故我々が第二活用によつて終結形に於て取る時、同上時制範疇の表現に對して動詞「得」*u* に突然變はらなければならないか、是は全く理解も説明も出來ない。

終結形語尾 -*u* は動詞「得」*u* に外ならないと陳べる「得る」説は第二活用動詞現在時終結形が主要動詞プラス助動詞「得」*u* から形成されると云ふ事を同じく斷言するのである。

が果して類似の言廻しは主要動詞の副動詞〔deepričastie〕〔英の gerund に當る「行きて」「讀んで」の形〕プラス助動詞 *mora*(*f*)*u*「貰ふ」〔polučat'〕の體裁に於ける其特殊表現をも全く他の意義をも有する特別の日本語慣用法ではないのであらうか。

主要動詞の副動詞プラス「貰ふ」*mora*(*f*)*u* なる構成は主體が行爲を完成するのでなく、主要動詞によつて表現される行爲が誰かによつて主體に對して完成されると云ふ意味であると云ふ事を我々は知つてゐる。同じ主要動詞、が副動詞の代りに語基プラス *mora*(*f*)*u* の代りに他の助動詞「得」*u* の形で取られたもののみが現在時をも其終結形をも表現すると云ふ事が然らば如何にして生ずるのであるか。表示の同一結合は如

何にして様々の事物を斯くも標記するのであるか。

就中、「得る」説の觀點から好奇的な一動詞、特に第二活用動詞 *uku*「受く」〔polučat'〕に私は途中で停止してゐる事は出來ない。此説に從ふと此動詞の現在時終結形 *uku* は「受」〔polučat'〕なる意義を有する語基 *uku-* と同じく「得」〔polučat'〕なる意義を有する現在時終結形語尾 *-u* とに分裂しなければならない。かくて *uku* は元來單に「受」〔polučat'〕でなく「受得」〔polučat' polučenie を意味しなければならない。他方から、主要動詞の副動詞と助動詞 *mora(f)u*「貰ふ」の直前上揭構造意義との觀點からは、*uk-* は「得る」説の解釋によれば主要動詞であり、*-u* は助動詞「得」である *uku* なるものは、主語自身は受けないと云ふ事、語基 *uk-* によつて表現される「受」〔polučenie〕なる行爲は、主體が直接には何物をも受けないが故に、主體に對しては誰か他の者によつて完成されるのであると云ふ事を意味しなければならない。

勿論、「得る」説が至る是等支離滅裂さの全部へは頗る學問的な形を附加して何等かの文學的説明を工夫する事が出來る、が私は盲目的傳統によつてのみ保たれてゐる此少許熟慮された説に引懸ると、其等を實際に除き得るであらうかと云ふ事を頗る疑ふのである。

第二活用動詞現在時終結形語尾と第一活用動詞同時制終結・限定形語尾との同一性に對する唯一的反駁なるものは、第二活用動詞現在時終結形語尾 *-u* か第一活用動詞に於ける語尾 *-u* に固有なる限定機能を有しないと云ふ事に存し得る。併しながら、此反駁は前者が後者と同樣な終結機能を有するが故に五割は全く消滅して了ふのである。

此外に、此反駁は、例へば、室町期後半（主として文明年間（一四六九—一四八六）以後）に於ける寺院の抄物

〔kommentarij〕(*syo:mono*) や漢詩及び佛典への講義に於て我々が發見する限定機能に於て終結形使用の場合が遭遇すると云ふ事實によつても弱められる。かくて、我々は *sisuru mono* 死スル者【以上四字原著通】の代りに *sisu mono* 死ス者【以上三字同上】、*xossuru koto* 欲スル事【以上四字同上】の代りに *xossu koto* 欲ス事【以上三字同上】を有するのである。(5)

變格と見做される限定機能に於ける現在時終結形使用を大槻文彦〔F. O:cuki〕が其『廣日本文典』〔Prostrannaja japonskaja grammatika〕に於て指示してゐて、彼は其中で次の例證を與へてゐる、*koto vo makasu toki* 事を仕す時【以上五字原著通】、*gi vo tona(f)u xito* 義を唱ふ人【同上】、*cuma vo ho(f)u sika* 妻を戀ふ鹿【同上】等。(6)

勿論、普通文語の觀點からは限定の代りの此終結形使用は變格である。が其にも不拘是は、第二活用動詞現在時終結形語尾 -*u* は第一活用動詞現在時終結・限定形語尾 -*u* が常に遂行する限定機能を時々矢張適當に遂行すると云ふ事を表してゐるのであつて、前者が後者の様に其を常には遂行しないとすると、是は謂はば其とは獨立の理由、又は其外に横る事情によつて生ずるのである。

二) 第二活用動詞現在時限定形語尾 -*u* と第一活用動詞現在時終結・限定形語尾 -*u* との同一性

第二群は次の動詞によつて表示される。

(A) 自動詞

vavakuru, 一活、*vavaku*, *vavakuru*, 二活、散亂る、

nedzikuru, 一活、*nedziku*, *nedzikuru*, 二活、捩くる。

torokuru, 一活、*toroku*, *torokuru*, 二活、盪る、

sujuru, 一活、*suju*, *sujuru*, 二活、饐る、

xaguru, 一活、*xagu*, *xaguru*, 二活、剝ぐる。

(B)　他動詞

kanadzuru, 一活、*kanadzu*, *kanadzuru*, 二活、奏づる（例へば、琴）、

karaguru, 一活、*karagu*, *karaguru*, 二活、繰る、

mokaguru, 一活、*mokagu*, *mokaguru*, 二活、擡ぐる。(7)

第二活用動詞の此群に於ける前掲現在時限定形は第一活用動詞對應現在時終結・限定形と少しも區別されないといふ事が解るのは困難でない。此處に於て我々が外的合致でなく、內的形態同一性を扱ふのであると云ふ事、是は次の事から解るのである。

現在時終結・限定形語尾 *-u* を棄てて我々が得る此群に於ける前掲第一活用動詞語基を相互對照して、我々は其等の間に或共通接尾辭 *-ur-*（例へば、*kanadzur-*, *karagur-*, *varakur-* は當然 > *kanadz+ru-*, *karag+ur-*, *varak+ur-* に分裂する）を分離する。從つて、第一活用是等動詞語基は單一語基プラス接尾辭 *-ur-* から成立する派生的なものである。其方式は（V+*ur*）- であらう。

同じ複合組成を現在時限定形に於ける第二活用全動詞語基も有してゐる。其は單一語基プラス接尾辭 *-ur-* から成

立する派生語基を想像するのであつて、其方式も亦（V＋ur）・であらう。

かくて此群の第二活用動詞現在時限定形構造、即ち（V＋ur）＋u は同じ群の第一活用動詞現在時終結・限定形構造、即ち（V＋ur）＋u と丁度同じなのである。從つて、我々は外的合致、即ち第一活用の *kanadzuri*＝第二活用の *kanadzuru* でなく、內的形態同一性、即ち第一活用の（*kanadz*＋ur）＋u＝第二活用の（*kanadz*＋ur）＋u を有してゐるのである。

此內的同一性は、第二活用是等動詞現在時限定形語尾が第一活用對應動詞現在時終結・限定形語尾 -u に外ならないと見做す根據を與へる次第なのである。

が此結論一般は、第二活用全動詞一般現在時限定語尾が第一活用全動詞終結・限定形語尾と同一であると云ふ事に至るのである。

＊　＊　＊

かくて、一群動詞が第二活用動詞現在時終結形と第一活用動詞現在時終結・限定形との同一性を我々に與へるとすると、他群動詞は此現在時終結・限定形と第二活用動詞現在時限定形との同一性を與へる。是から勿論第二活用動詞現在時終結及び限定形語尾は第一活用動詞に於ては同時制終結・限定形語尾である同一形態質 -u なのであると云ふ歸結のみがあり得る。

第十節　二語基—單一及び派生—利用の結果としての第二及び第三活用動詞現在時終結及び限定形分化【四九—五〇頁】

上に私は第二及び第三活用動詞に於ける現在時終結及び限定形分化は二つの異る語基へ同一語尾 -u 附加の結果生じたのであると云ふ推測を吐露した。此推測は實際に確められる樣に思はれる。

我々が第一又は第二群動詞から任意のものを第一活用によつて取るならば、其は現在時終結機能に於ても限定機能に於ても同一語基を有すると云ふ事が解る。が同じ動詞のみを第二活用によつて取るのであると、命題は早速換つて了ふ。二機能に對して同一語基の代りに其等に對しては最早二つの異る語基を我々は發見するのである。

例へば第一群に屬する動詞 (v)osoru を取らう。第一活用によれば其は終結形に於ても限定形に於ても同一語基 (v)osor- を有してゐるし、第二活用によれば其は終結形に於ては語基 (v)osor- を限定形に於ては語基 (v)osoru- を有する。更に例へば動詞 karaguru を第二群から取らう。第一活用によれば其は終結形に於ても限定形に於ても同一語基 karagur- を、第二活用によつては終結形に於ては karag- を限定形に於ては karagur- を有する。一目瞭然に是は次の樣に表示する事が出來る。

(v)osor+u, 第一活、終結・限定形＝(v)osor+u, 第二活、終結形、
(v)osoru+u, 第二活、限定形、
karagur+u 第一活、終結・限定形＝karagur+u, 第二活、限定形、

karag+u, 第二活、終結形。

かくて、當然第二活用（第三活用も亦）動詞現在時終結及び限定形分化は一の代りに二語基の此時制終結及び限定機能に對する利用結果であると云ふ結論になるのである。

此結論は、口語に於ける終結形の消失から生ずると云ふ事によつて特に確められる。第二及び第三活用動詞の此形の消失の爲に現在時範疇形成に際しては、一は文語終結形に於て、他は文語限定形に於て與へられたる二つの以前の語基の代りに、對應文語限定形に於て與へられたる一語基のみを有してゐて、語尾 -ru は現在時終結及び限定機能を其が此一語基へのみの附加によつて遂行するのである。

第十一節　第三活用動詞現在時終結及び限定形語尾 -ru と第一活用動詞現在時終結。限定形語尾 -u との同一性【五〇—一頁】

第一によつても第三活用によつても活用する動詞の吟味によつて語尾 -u の同一性に就ての類推的結論へ我々は移る。併しながら如何なる類似も繰返されざるが故に、私は只簡單に基礎事實を記さう。是等動詞も亦二群を形成するのである。

第一群へは其現在時終結形が第一活用對應動詞の同じ時制終結・限定形と同一なる動詞が屬する。是等動詞は次の

如し。

(A) 自動詞

aku, 一及三活、飽く、

iku, 一及三活、生く、

cuku, 一及三活、盡く、

kucu, 一及三活、朽つ、

micu, 一及三活、滿つ、

sobocu, 一及三活、(廢語)、濡つ、

xidzu, 一及三活、(廢語)、漬づ、

sisabu, 一及三活、荒ぶ、

simu, 一及三活、滲む。

(B) 他動詞

karu, 一及三活、借る、

awaremu, 一及三活、憐む、

inamu, 一及三活、否む、

obu, 一及三活、帶ぶ、

inobu, 一及三活、忍ぶ、

uramu, 一及三活、恨む。

第二群に於ては我々は、其現在時限定形が第一活用對應動詞の同じ時制終結・限定形と同一なる動詞を有する、特に

(A) 自動詞

araburu, 一活、*araburu*, *arabiru*, 三活、荒ぶる、

karaburu, 一活、*karaburu*, *karabiru*, 三活、涸ぶる、

susuburu, 一活、*susuburu*, *susubiru*, 三活、煤ぶる、

(*eibiru*, 一活、*eibiru*, 三活(口語)、禿る)。

(B) 他動詞

nedzuru, 一活、*nedzuru*, 三活(口語), *nedzuru*, (文語限定形)、捩る。

第一群が第三活用動詞現在時終結形語尾 *-u* と第一活用對應動詞の同じ時制終結・限定形語尾 *-u* との同一性を與へるならば、第二群は我々が知つてゐる通り形態質 *-u* である様な同じ時制限定形語尾の後者との同一性に至るのである。

第十二節　第二及び第三活用動詞現在時終結形語尾と第一、第二及び第三の三活用によつて活

用する動詞を例證とする第一活用動詞現在時終結・限定形語尾との同一性【五二頁】

第二及び第三活用動詞現在時終結形語尾、形態質-*u*と第一活用動詞現在時終結・限定形語尾、形態質-*u*との同一性の爲に、從つて第二活用動詞現在時終結形語尾と第三活用動詞同じ形語尾との相互同一性は、或動詞は第一、第二及び第三の全三活用によつて活用する事實をも亦語つてゐる。

かゝるものは、例へば次の動詞である。

ure(f)u, 第一活用、*ure(f)u*, 第二活用、及び *ure(f)u*, 第三活用、憂ふ、等（現在では第二活用によつて活用する）、

momidzu, 第一活用、*momidzu*, 第二活用、及び *momidzu*, 第三活用、紅葉づ（廢語）。

第一活用によつて取られた動詞 *ure(f)u* の現在時終結・限定形と第二及び第三活用によつて取られた同じ動詞 *ure(f)u* の現在時終結形との同一性は現在時是等全形語尾は同一形態質-*u*であると云ふ事の餘分な論證を與へてゐるのである。

何故、果して、第一活用動詞現在時終結・限定形に於てそして第三活用動詞同じ時制終結形に於て動詞 *u*「得」ではない語尾 *u* は第二活用動詞現在時終結形に於て動詞 *u*「得」でなければならないか、そして最後に如何にして此魔術的變化が生ずるのであるか。第二活用動詞語尾「得る」說の擁護者は其正當を論證す可く少からず苦しまねばならないのだと思ふ。

是と共に此事實は第二及び第三活用動詞現在時終結形語尾に於て我々は同一形態質-ミを有すると云ふ上爲の結論（本章第三節、三八頁參照）を確めるのである。

第十三節　或第二活用動詞現在時終結形語尾と第三活用對應動詞現在時口語形語尾との同一性【五二―五三頁】

現在時終結形語尾-ミに於てそして同じ時制限定形語尾-ミに於て我々が同一形態質-ミを有すると云ふ事に就ては、或第二活用動詞現在時終結形と第三活用對應動詞現在時口語形との同一性も亦語つてゐる。かくて、例へば我々は *nebiru*, 第三活用口語形現在時及び *nebiru*, 第二活用終結形現在時、老成る、*sabiru*, 第三活用口語形現在時及び *sabiru*, 第二活用終結形現在時、荒る。

第十四節　形態質-ミは全活用動詞現在時全形語尾【五三頁】

第一及び第四活用終結・限定、第二及び第三活用終結及び限定の現在時全形語尾は同一形態質-ミであると云ふ事に就て其全總和が證する事實は概して斯かるものなのである。

第十五節　或第二活用動詞及び或變格動詞の特質【五三―六頁】

併しながら、例へば *fu, furu*（口語 *xeru*），經る、*nu, nuru*（口語 *neru*），寢る、の樣な或第二活用動詞は特別註解を要する。動詞語基が一子音音聲質（所與例證では *f*＝*x*, *n*）からのみ成立し得ると認容するならば、第二活用動詞現在時語尾に就て語られた凡ては是等動詞へ關係するのである。

が一子音音聲質のみからなる語基は考へ得られないと思ふならば、文語に於ては是等動詞終結形と其等の語基とは同一であると見做さなければならない。是は動詞 *fu, nu* に於ける末尾音聲質 *u* は語基母音でもあり同時に現在時終結形語尾の意義を有すると云ふ事を意味しよう。

是と共に第二活用是等動詞現在時終結形語尾機能が語基末尾母音音聲質によつて遂行されるが、特殊形態質 -*u* によつては然らざるだけ、それだけ從つて是等動詞に於ては現在時終結形語尾は其他の第二活用全動詞、卽ち壓倒的大部分の現在時終結形語尾とは、そして特殊形態質 -*u* である樣な第三活用動詞の同じ形語尾とは全くは同一でない、又は機能的にのみ同一である。

かくて、第二活用動詞に於ては、我々は恰も現在時終結形二語尾を有すると云ふ事が分る。（一）第二活用動詞の壓倒的大部分に於ては現在時終結形語尾は第三活用動詞現在時終結形語尾に於ても我々の有してゐる同じ形態質 -*u* であり、（二）第二活用の或動詞に於ては現在時終結形語尾の役を演ずるのは此形態質 -*u* でなく、語基末尾母音音聲質 *u* である。

此事情は第二活用動詞現在時終結形語尾と同じ時制二形語尾との同一性に就て論題の存する場合を考慮に置く必要がある。

前掲 *fu*, *mu* 等の類に於ける或第二活用動詞現在時終結形語尾 *-u* は第三活用動詞終結形語尾 *-u* と相對的に のみ同一であり、第二活用動詞現在時限定形語尾 *-u* とも形態質 *-u* である樣な現在時全一般形語尾とも亦同一であつて、又は、換言すれば、機能的にのみ、發生的にでなく、同一であると云ふ事が是から生ずるのであつて、何とならば其起源によれば其は語基末尾音聲質であつて、特殊形態質ではないからである。

他方からは、動詞 *fu*, *mu* に於て末尾音聲質 *u* が語基母音であるならば、是等動詞限定形に於て與へられたる派生語基は最早、*-ur* でなく、開語基 *fu-*, *mu-* プラス接尾辭 *-r-* から成立するのであらう。果して、是等動詞現在時限定形と其所謂條件語基とを、即ち *furu*——*fure-*, *muru*——*mure-* を對照して、我々は當然其等を *furu+u*, *fur+e-*, *mur+u*, *mur+e-* に分解するのであつて、是から其等語基は對應的に *fur-*, *mur-* であり、限定形語尾は *-u* でありそして所謂條件語基接尾辭は *-e-* であると云ふ事が生ずる。是等語基 *fur-*, *mur-* を我々が 所 與 の 場合 に 於 て 單一語基、即ち *fu*, *mu* と誤認する是等動詞現在時終結形、即ち *fu*, *mu* と對照するならば、語基 *fur-*, *mur-* に於ては形態質 *-r-* が分離するのであつて、是から語基 *fur-*, *mur-* は單一語基から形成され、形態質 *-r-* によつて擴張されたる派生的のものであると云ふ事になるのである。

今度は同じ動詞現在時口語形へ轉ずると、我々は其は對應現在時文語限定形と同じく、即ち派生語基へ其語尾 *-u* を附加して形成されると云ふ事が解る。

現在時口語形派生語基と此時制文語限定形派生語基との差異なるものは、子音接尾辭 -y- が第一の場合は不定形と同一なる單一語基へ補足され、第二の場合は現在時終結形と同一なる單一語基へ補足されると云ふ事に存する。

就中、或場合には單一語基は不定形と同一であり、他の場合には現在時終結形と同一であると云ふ事情は、是等兩語基が母音音聲質 e と i の交替が起つた一語基から形成された樣に見えると云ふ事、そして單に時の經過と共に此語基の音聲分化と連結して其一變種が不定形意義を獲得したが、他變種は動詞「得る」語基の音聲變種が是等形意義を獲得したと同じ理由によつて現在時終結形意義を獲得したと云ふ事を暗示する（十六頁上參照）。從つて、發生的には是等動詞の現在時口語形派生語基と現在時限定形派生語基とは母音プラス同一子音接尾辭 -y- なる交替を以て單一語基に分裂するのであつて、是は例へば動詞「寢る」ney- と niy- の派生語基は發生的に同一であると云ふ事を意味する。

かくて、或第二活用動詞の特質は次に存するのである。

第一に、是等動詞現在時終結形語尾機能は語基末尾音聲質によつて、特殊形態質によつてでなく、遂行される。

第二に、此故に是等動詞現在時終結形語尾は其他の現在時全形語尾、形態質 -u と部分的に、卽ち機能的にのみ同一である。

第三に、其語尾 -u が附加される現在時の文語限定及び口語形派生語基は、閉語基へ接尾辭 -iy- 又は -ey- をでなく、開語基へ接尾辭 -y- を補正して形成される。

就中、是等全特質は私の意見によれば第二活用動詞の此僅少群を全く獨立活用に分離する爲の十分な根據なのであ

る。

＊　＊　＊

第二活用動詞の是等若干の現在時終結形語尾に就て言はれた凡ては、例へば「爲る」*su, suru* 及び「來る」*ku, kuru* の樣な變格動詞現在時終結形語尾へも概して亦關係する。

是等動詞現在時終結形 *su, ku* に於ては末尾音聲質 *u* は同動詞語基へ屬し(10) 其故特殊形態質 *u* によつて普通遂行される現在時終結形機能を既に遂行してゐるのであつて、卽ち換言すれば、其は第一及び第四活用全動詞現在時終結・限定形に於てそして第二活用全動詞及び第三活用全動詞の同じ時制終結及び限定形に於て我々が發見する現在時特別語尾 *-u* ではないのである。

從つて、動詞現在時終結形 *su, ku* に於ける末尾音聲質 *u* は現在時特別語尾ではないのであり、此語尾機能を遂行するに過ぎないだけに、現在時終結形語尾としては、其は同じ動詞現在時限定形語尾と部分的、卽ち機能的にのみ同一である。

是等二變格動詞現在時終結形が語基と同一であると我々が見做すならば、我々が現在時限定形及び所謂條件語基に於て、卽ち *suru, kuru, sure-, kure-* に於て發見する同じ動詞派生語基は開語基、卽ち *su-, ku-* プラス接尾辭 *-r-* から成立する、卽ち上に吟味された動詞 *furu, muru* の派生語基と同じ組成を有すると云ふ事は自明なのである。

是等變格動詞現在時限定形なるものは同じ動詞 *furu, muru* の現在時限定形と同じく、卽ち語尾 *u* を對應派生語基へ補足して形成される。

第十六節　現在時語尾に就ての問題に於ける日本語舊及び現代歐文法の誤謬は何に存するか、其意義と起源【五六—八頁】

上述凡てから、第二及び第三活用動詞現在時文語限定形語尾は *-uru* であり、同じ活用現在時口語形は *-eru* 及び *-iru* であると見做す文法も、現在時語尾を *-ru* と見做す文法も、是等全語尾を採用する文法も誤つてゐると云ふ事になるのである。

-uru を第二及び第三活用現在時文語限定形語尾と、*-eru* と *-iru* を同じ活用現在時口語形語尾と、そして *-ru* を第四活用動詞現在時語尾と誤認する文法の誤謬は現在時語尾 *-u*（彼等は派生語基接尾辭 *-ur-*（第二及び第三文語活用に於て）、*-er-*（第二口語活用に於て）、*-ir-*（第三口語活用に於て）、そして *-r-*（第四活用）を附加すると云ふ事に存する。

併しながら、前節に於て爲された豫告條件から出て來る樣に、例へば *furu*（文）、*xeru*（口）經る、の樣に第二活用の斯かる動詞に論題の存する場合には *-uru* を現在時文語限定形語尾そして *-eru* を同じ時制口語形語尾と誤認する文法の誤謬は、現在時語尾 *-u* へ其等によつて派生語基接尾辭 *-r-* が後者に先行する語基末尾母音 *u* 又は *e* と共に附加されると云ふ事に於て表現される。

-ru を第二及び第三活用動詞現在時語尾と誤認する文法の誤謬なるものは、現在時語尾 *u* へ彼等が普通に派生語

基接尾辭部分、音聲質ゝを、そして或場合のみに派生語基全接尾辭 -r-（例へば、動詞 *furu*, *xeru*, 經る、*neru*, 寢る、等）を附加すると云ふ事に存する。

概して此誤謬は形式附屬物の過度分解〔Pereraz-loženie〕に歸するのである。

此誤謬は日本語動詞形態構造を求め、其語基と其形式附屬物との間の相互關係の正當なる理解を妨げ、日本語形態範疇間の相互關係研究上の障碍石であり、動詞形式附屬物一般の量と、そして特に、其意義が現代言語意識に對して喪失された古風な接尾辭（*-ur-*, *-er-*, *-ir-*, *-r-*）の量を削減して、恐らくは、信賴し得る比較言語學的所與が惹付けられまい限り、正確に制定されないのであらう。(11)

此誤謬の源泉は結局三百二十五年前に Rodriguez によつて爲された動詞形不當對照なのである。

上示された樣に、Chamberlain による或第二活用動詞現在時の我が文語限定形を Rodriguez は不定形語尾 *-e* を *-uru* に變更して形成する、卽ち換言すれば、彼は此語尾 *-uru* を不定形と我が文語限定、元來 Rodriguez にあつては現在時九州口語形との對照（例へば、*age*——*aguru* は *-uru* を與へる）によつて得てゐるのである。

正に亦彼は Chamberlain による第三活用動詞現在時の我が文語限定形に對して語尾 *-uru* をも、卽ち不定形と我が現在時文語限定形とを對照して（例へば *abi*——*aburu* は *-uru* を與へる）、得てゐるのである。

不定形と我が現在時口語形との對照、例へば *age*——*aeru*, *abi*——*abiru* なるものは語尾 *-ru* を與へる。

正に亦現在時文語限定形と口語形とを同じ不定形に對照して、Curtius 文法は我が第二活用動詞に對しては語尾 *-urn*, *-eru* を、我が第三活用動詞に對しては語尾 *-urn*, *-iru* を得てゐるのである、同じく Hoffmann 文法も語尾 *-urn*, *-eru*, *-urn*, *-iru*, を採用して、Rosny 文法も一語尾 *-ru* を採用して扱つてゐる。

同一派生語基を有する動詞形（例へば、*agurn*＜*agur*＋*n*, *agure*-＜*agur*＋*e*-又は *agern*＜*ager*＋*n*, *agere*-＜*ager*＋*e*-）を取る代りに、單一及び派生の異る語基を有する動詞形（例へば、*age*＜*ag*＋*e* 及び *agurn*＜*agur*＋*n*）を Rodriguez は比較條項として取つたが故に、此對照は不當なのである。此結果或場合には（*-urn*）彼は現在時語尾 *-u*（派生語基全接尾辭（*-ur-*）を關係させ、他の場合には（*-ru*）、不定形語尾 *-e*, *-i* を接尾辭 *-er-*, *-ir-* に屬する母音 *e*, *i* と同一視して、其部分、音聲質 *r* を關係させた。

此 Rodriguez の誤謬をば Curtius, Hoffmann 及び Rosny 文法も繰返してゐる。

Curtius と Hoffmann は現在時語尾 *-u*（派生語基接尾辭 *-ur-*, *-er-*, *-ir-* を附加し、Rosny は是等接尾辭の子音部、音聲質 *r* を附加する。

Rodriguez, Curtius 及び Hoffmann 文法から此誤謬は Aston 及び Chamberlain 文法へ、後者達から殘餘全部へ移つた。

其語尾固定なるものに於ては *-urn*, *-eru* を動詞「得る」*urn*, *eru* と同一視する第二活用動詞語尾「得る」說が責任があるのであつて、其發頭人は結局 Hoffmann なのである。

かくて、現在時文語限定及び口語形に於ける第二及び第三活用動詞現在時語尾現代誤謬形態論の源泉は、一方から

は三百餘年前に書かれた Rodriguez 文法であり、他方からは七十及び六十年前に書かれた Curtius 及び Hoffmann 文法であるのである。

此誤謬形態論が爾來日本語現代歐文法に於て保たれてゐるとすると、是は一方からは其等の狹少なる實用主義によつて、實用的規則系列を、而も最も屢々獨斷形式に於て、與へる程には、言語を科學的に解剖したり研究したりしないと云ふ志向によつて、他方からは舊文法相續への無批判的關係によつて説明されるのである。

第十七節　受身・可能相動詞が此相の「在得る」説と連結せる現在時語尾に就ての問題【五八—九頁】

一般通用の受身・可能相「在得る」説がないならば、是で以て或は本論を終了し得るのであらう。此説に從ふと、此相の所謂語尾、現在時終結形に於ける -*aru* 及び同じ時制限定形に於ける -*aruru* は、動詞「得る」(to get) *u*, *uru* の終結及び限定形を有する動詞「在る」*aru* の附加に外ならないものを表示する。

かくて、此説によると、此相の現在時終結形に於ける末尾音聲質 *u* は同じ形に於ける動詞「得」*u* であり、限定形に於ける音聲質 *uru* は限定形に於ける同じ動詞「得る」*uru* なのである。

此説が眞實であるとすると、第二活用動詞現在時終結及び限定形に對して上に制定された凡ては受身・可能相動詞現在時終結及び限定形へは不適用なる事が分るのであり、後者は一般狀勢からの例外なる事が分る。

併しながら、受身・可能相の此一般通用說が自身下に强固な形態基礎を有しないのみならず、却て受身・可能動詞の形態解剖によつて顚倒されさへするのであると、そして此故に此相の動詞現在時終結及び限定形は第二及び第三活用の其他の全動詞現在時終結及び限定形と同じ形態を有してゐて、其によつて何等の例外をも其等に對して與へる必要がないのであると見做す根據を十分に有する樣に思はれる。

動詞「在る」も動詞「得る」も實際に受身・可能相形成に何等關與しないと云ふ事、そして此故に動詞「得る」は此相の動詞現在時終結形へも限定形へも何等の關係を有しないと云ふ事、是は此「在得る」說の吟味に從事して、我々が以下に於て確信する次第なのである。

註　1　此命題の方式化を私は

Prof. N. N. Durnovo. Grammatičeskij slovar' (grammatičeskie i lingvističeskie terminy), str. 134. Izdatel'stvo L. D. Frenkel'. Moskva—Petrograd. 1924【ドゥルノヴォ教授、文法辭典（文法及言語學術語）、一三四頁、ヒル・デ・フリヒヌキエリ出版所、莫斯科—彼得市、一九二四年】。

に借用する。

Prof. V. A. Bogorodickij. Lekcii po obščemu jazykovedeniju, str. 112—117. Kazan'. 1911【ボゴロヂッキィ教授、一般言語學講義、一一二—一一七頁、カザニ、一九一一年】。

A. M. Peškovskij. Russkij sintaksis v naučnom osveščenij, str. 11—23. Giz. Moskva—Leningrad. 1928【既出】。

E. D. Polivanov. Vvedenie v jazykoznanie dlja Vostokovednyx Vuzov, str. 13—24. Leningrad. 1928. Izd. Leningradskogo Vostočnogo Instituta imeni A. S. Enukidze【ポリヴァノフ、高等東洋學校用言語學概論、一三—二四頁、リェニングラード、一九二八年、ア・エス・エヌキッゼの名に於けるリェニングラード東方學院出版所】。

D. N. Ušakov. Kratkoe vvedenie v nauku o jazyke, izdanie pjatoe, str. 64—69. GIZ. Moskva【ウシャコフ、言語學小概論、五版、六四—六九頁、一九一三年初版、國立出版局、莫斯科】。

Prof. V. Poržezinskij. Vvedenie v jazykovedenie, str. 134—144. Moskva. 1916【ポルジェジンスキイ(波蘭土音ポルジェジンスキ)教授、言語學概論、一三四—一四四頁、莫斯科、一九一六年(第四版)】。

Prof. P. A. Buzuk. Osnovnye voprosy jazykovedenija, 2-e izdanie, str. 99—103. Moskva. 1924【ブズク教授、言語學基本問題、再版、九九—一〇三頁、莫斯科、一九二四年。初版は Očerki po psixologii jazyka, Odessa, 1918 (言語心理學概論、オデッサ、一九一八年)】。

F. de Saussure. Cours de Linguistique Générale, page 177—179. Paris【deuxième édition 1922. 初版 Lausanne et Paris, 1916. 小林英夫譯『言語學原論』、二五九—二六〇頁、東京、昭和三年。Übersetzt von Herman Lommel, Grundfragen der allgemeinen Sprachwissenschaft, Berlin und Leipzig 1931. S. 153—154. Rus. perevod, Socekgiz, Kurs obščej lingvistiki, Moskva, 1933 g.】。

J. Vendryes. Le Langage. page 85—105. Paris 1921【Translated by Paul Radin. Language, page 73—89. London and New York. 1925】。

K. Brugmann. Abrégé de Grammaire Comparée des Langues Indo-Européennes d'après le Précis de Grammaire

Comparée de K. Brugmann et B. Delbrück.【Traduit par J. Bloch, A. Cuny et A. Ernout sous la direction de A. Meillet et R. Gauthiot.】page 297—301. Paris. 1905【獨語原本 Kurze Vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen. Auf Grund des fünfbändigen 'Grundriss der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen von K. Brugmann und B. Delbrück'. Berlin und Leipzig. 1903. S. 231—235】。

A. Meillet. Introduction à l'Etude Comparative des Langues Indo-Européennes, sixième édition, page 115—121. Paris. 1924【初版 1903。Übersetzt von Wilhelm Printz. Einführung in die vergleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen. 1909. Leipzig und Berlin. S. 82—86. Kudrjavskij 露譯本及び Michalski 波譯本あり】。

をも比較せよ。【以上三六頁】

2 聞く、泳ぐ、刺す、待つ、解る、呼ぶ、買ふ、讀む。【以上三七頁】

3 餓う、掛く、揚ぐ、見ゆ、着す、立つ、出づ、流る、震ぬ、食ふ、答ふ、止む、起く、過ぐ、悔ゆ、落つ、耻づ、降る、浴ぶ、强ふ、滲む。【以上三八頁】

4 是等殆ど全動詞は現在では第二活用によつて活用する。此表は二倍に擴大出來よう。【以上四六頁】

5 湯澤　幸吉郎・國語史料としての抄物・國語と國文學・大正十五年六月號・【以上原著通、以下露文字寫音及露譯省略、第三卷第六號通卷第二十六號】三七頁參照。

6 大槻　文彥・廣日本文典・明治三十七年第二十六版・【以上原著通、以下露文字寫音及露譯省略、明治三十年初版】、八九頁參照。【以上四七頁】

7 是等動詞は今普通第二活用によつて活用する。【以上四八頁】

8 現在では是等動詞の大部分は第三活用によつて活用する。

9 今是等全動詞は、*uraumu* 以外は、第三活用によつて活用する。【以上五一頁】

10 音韻質 *u* は語基に屬すると云ふ同じ觀點を E. D. Polivanov 教授も墨守するらしい。是は少くとも、彼が語基の三交替 *ku-/ki-/ko-* 及び *su-/si-/se-* に就て語る所から出て來るのである。Op. cit., str. 16 參照。

就中、動詞「爲る」の使役相語基 *su-*(*ssu*<*su*+*s*+*u*) を注意するならば、母音語基の四交替をも或は認容し得よう。【以上五五頁】

11 私によつて推測された接尾辭 *-ur-*, *-er-* 及び *-ir-* の意義に關しては第六章第七節參照。【以上五七頁】

第十七輯蕪稿補正　九二—三頁

Macokin 氏に關しては、日露貿易通信社『日露年鑑』昭和五年（1930）版に（三三六頁）同文面の見えるのを此種資料の最初とする。因にM氏の父稱はPetrovič（ペトロヴィチ）、新暦一八八六年十二月廿三日 Kiev（キィエフ）の醫家に生れ、浦鹽斯德で中學校卒業、暫く Xar'kov（ハリコフ）大學に學び、次で浦鹽斯德東方學院を一九一二年に終了されたのであると云ふ。

Dostoevskij（ドストイエフスキイ）氏紹介文獨譯さへもが其の題名のみを辛じて Asia Major, Lpz. Volumen VIII, 1933 Bibliotheca orientalis, Japan, II. Sprache, S. 583 に現してゐるに過ぎない。獨譯D氏論文は雜誌『コトバ』へ近く自分が邦語化發表豫定。因にD氏の名は Milij（ミリイ）、父稱は Fedorovič（フヨドロヴィチ）、彼の同姓文豪の姻戚に當る書誌學者であるが、最近物故されたと云ふ。

第十九輯蕪稿正誤　五九頁十三行

最後の　$+e,$　は　$+e-, taburu-\rangle(tab+ur)+e-;$　である。

Rodriguez 葡語原本や Curtius 蘭語原本との頁付對照は今は敢て行はない。

蕪譯に於て　語基　は　語幹　と改める方が良からう。此の次から改める。

頁	行	舊	改	頁	行	舊	改
		第十五輯		六	一五	〃	るのである
四一	一三	文本	語本	六二	六	列	〃
一六	獨文	獨語	六五	五	互間の	〃	列、
四二	一	英文	英語	六七	一三	文本	互
二	原文	原著	一六	〃	語本	〃	語版
四五	二	其によつて	同じく	一七	文版	語原本	語原本
四六	五	時稱	時制	六九	四	吾人	我々
特に	元來	七	〃	〃	〃	〃	〃
四九	五	是	此	七〇	六	が、併し	、が
六	が爲	故	七一	四	吾人	我々	我々
五〇	一〇	時稱	時制	七二	九	いのである	い
一二	〃	〃	〃	七	七三	一一	が
五一	一	〃	〃	一三	所が	〃	、〃
三	〃	〃	代用し	七四	三	時稱	時制
五三	七	取替へ	〃	五	のである。	。	相互
一〇	〃	〃	制	七五	三	互に	元來の
五五	一〇	稱の	時制	七	特別	〃	〃
五七	三	時稱	係さす	八	比較	對照	
九	せしめる	文原書	語原本				
六〇	一	九	時稱	時制			
六一	四	吾人	我々				

七六	八	の形の	形	一五
	一二	〃	〃	七七
七八	一〇	の形	形	二
	一三	併しながら	が	九
八〇	六	際の	際	一一
八二	一	吾人	我々	七八
八四	六	詞の	詞	一五
		第十七輯		
六九	八	英文	英語文	七九
	九	獨文	獨語文	一〇
七〇	四	佛版	佛語版	一一
	六	佛版	佛語版	八〇
	九	が其	そして其	九
	一三			八一
	一四	佛版	佛語版	一
		〃	〃	五
七一	二	法式	方式化	八四
	一二	應する	應	一
七二	九	時稱	時制	一二
七三	三	るのである	る	八五
七四	二	佛版	佛語版	五
七五	三	〃	〃	八六
	七	行する	行	五
七六	一二	執	取	八九
				一・
				九〇
				二
				三
				九四上
				三
				下一九
				九五下
				六

るのである	る	佛版	佛語
〃	〃	〃	〃
以下三行抹殺			
英佛文	英佛語		

〔以上〕